

「対話」のもつ可能性

国立特別支援教育総合研究所

牧野泰美

1. 「対話」をめぐる

- ・どんな関わりも、どんな臨床も、「対話」は柱である
- ・「対話」を通して、自己を発見できる
- ・「対話」を通して、吃音を、自己を、そして吃音のある自分（どもる自分）を対象化できる
- ・「対話」を通して、課題が引き出される、整理される
- ・「対話」の材料、「対話」の形は、様々にある
- ・「自・他」と「自・我」、「内なる他者」

2. 「対等」であること

- ・よくある親子のやりとり、教師と子どものやりとり
- ・思い、考えの背景、出どころ
- ・じっくり聞く、じっくり話し合う
- ・一緒に考える
- ・パートナー、同行者
- ・考える視点の発見、提供
- ・吃音、吃音のある自分（どもる自分）と向き合う
- ・本人中心

3. ことばの教室担当者の役割

- ・吃音のある自分（どもる自分）を見つめ、そのような自分がどうやって過ごすか、どう存在していくか、どう生きていくかを考える。あるいは、考えていくための手がかりを見つける。
- ・そのための実践は、多様な姿・形があり得る。
- ・その実践の姿・形、子どもとの関わりのありようを、教室担当者は常に考える必要がある。ある意味、それを考えるのが仕事である。
- ・子ども自身が、吃音のある自分（どもる自分）が生きていくために、自分が何を学んでいくとよいかを考えること、それを支える。
- ・これらの仕事は、まさに教育の本質でもある。
- ・教室担当者の吃音観、世界観が問われる。子どもは担当者のまなざし（担当者の吃音観、世界観）を通して、自分を見つめることになる。

4. 吃音臨床と関係論

○関係論的な立場から、吃音のある子ども（人）との臨床を考えてみると・・・

「自らも生き生きと生きたいと願っている人としての臨床家が、吃音があることで悩む子ども（人）を取り巻いている人間関係、事物・事象との関係に参加し、その中に生きる人間間の共感性と、各々の自己性を育てるために関与する」こと

- ・見る、見られる
- ・見る基準
- ・関係の中で生き、関係の中で自己性を育てる
- ・周囲の人も関係の中で生きる存在
- ・見方を変換してみる
- ・共感性（関係性）と自己性

5. 共感性・関係性

- ・「間」に生じる問題
- ・相互の見合い方、向き合い方
- ・自らの見る視点
- ・関係が難しい、苦しい、と感じる
 - 共有が成立しない状態
 - 困った点での共有が成立し、他の面での共有が成立しない状態
 - 共有が一点に集中し、拡がらない状態
- ・関係への関与
 - 自己の再観察・再解釈
 - 人の再観察・再解釈
 - 子どもの再観察・再解釈
 - 事物・事象の再観察・再解釈
 - 人（子ども）と人（子ども）の関係の再観察・再解釈
 - 自己と人（子ども）の関係の再観察・再解釈
 - 自己と事物・事象の関係の再観察・再解釈
 - 自己と吃音の関係の再観察・再解釈
 - 人（子ども）と事物・事象との関係の再観察・再解釈
 - 人（子ども）と吃音との関係の再観察・再解釈
 - 状況の再観察・再解釈

6. 自己性

- ・周囲の人・事物・事象との関係の沈殿物
- ・存在意義
- ・今ある力、手持ちの力
 - 人は、いつも、今持っている力、手持ちの力で生きるほかない。

明日身に付く力を、今つかうことはできない。

今は、今の力で、今の自分のしゃべりでなんとかやっていく。

・ 肯定的に受け止められる実感

吃音のある子ども（人）が手持ちの力をつかい、今の暮らしの中で自分らしさを肯定的に受け止められる実感を味わえる時間を蓄積する。子どもと教師等の間のこのような関わりの積み重ねが、子どもが周囲の中で（周囲や自分と折り合いながら）生きていく力になる。

・ 自己有能感と自己肯定感

・ 役立つ

・ 喜ぶ／喜ばれる

・ 自己決定／主体性

・ 自己認識、自己理解

・ 自分研究、生き方研究

7. 吃音のある子ども（人）本人のレジリエンス、関わり手のレジリエンス

・ 自己信頼、他者信頼、自分らしさの受け止め（本人）

・ 本人と生きる（過ごす）ことを喜び、自分の人生を生きることを楽しむ（親、等）

・ 関わり手（親・教師・言語聴覚士等）もまた、子ども（人）にとっての人

・ 関わり手の人・事物・事象の見方、捉え方、向き合い方が問われる

・ 関わり手自身の周囲との共感性・関係性、自己性、レジリエンス

・ 関わり手の吃音観、価値観、人生観

8. 「私」の再構築

・ 「私」の成り立ちを振り返ってみる

・ 「私」はどうやって意味づけされてきたのか

・ 「私」の声、ことばは、どうやって意味づけされてきたのか

・ 育ちの中で意味づけ、形成されてきた「私」

・ 共感性・関係性と自己性の再構築

・ がんばりどころと、そうでないところ

・ 「ねばならない」ことはない／「ねばならない」からの解放

・ 発想の転換／そんな手もあったのか

・ いわゆる「逃げる」ことの再考／どこでも人生の舞台

・ 「今」も人生の本番

9. 吃音を語る

・ 暮らしを語る

・ 日常場面の対策（音読の時、日直の時、発表の時・・・）

- ・こんな時どうする？
- ・第三者の悩みごと、困りごと相談として
- ・語るための教材（ゲーム、絵本、物語、クイズ、言語関係図、吃音冰山、どもりカルタ、キャラクター、ジョハリの窓、自分探し、マイすごろく・・・）

10. おわりに

- ・自分を生きる
- ・生き方研究所
- ・ことばは ころを 超えない
- ・そばにいてくれるだけでいい

【連絡先】

239-8585 神奈川県横須賀市野比 5-1-1 国立特別支援教育総合研究所
 牧野泰美 Tel. 046-839-6839（直通） E-mail: makino@nise.go.jp

【文献】

- ・国立特別支援教育総合研究所（2007）吃音のある子どもの自己肯定感を支えるために．特教研 B-213．（研究代表：牧野泰美）
- ・国立特別支援教育総合研究所（2012）言語障害のある子どもの通常の学級における障害特性に応じた指導・支援の内容・方法に関する研究－通常の学級と通級指導教室の連携を通して－．特教研 B-274．（研究代表：牧野泰美）
- ・国立特別支援教育総合研究所（2015）「ことばの教室」ことはじめ．特教研 D-333．
- ・国立特別支援教育総合研究所（2017）平成 28 年度全国難聴・言語障害学級及び通級指導教室実態調査．特教研 B-312．
- ・牧野泰美（監修）阿部厚仁（編）（2007）言語障害のおともだち．ミネルヴァ書房．
- ・牧野泰美（2011）人（子ども）との関わり、自分自身との関わりを考える．スタタリング・ナウ，200 号．
- ・牧野泰美（編著）（2011）吃音を知る・学ぶ、自分を知る・学ぶための手がかり－吃音、そして自分自身と向き合うために－．特教研 F-154．
- ・牧野泰美（2017）難言教育における子どもとの関わりと教室経営の基礎基本．日本言語障害児教育研究会（編著）基礎からわかる言語障害児教育．学苑社，235-254．
- ・牧野泰美（2019a）子どもと教師の関係づくり、子どもと教師のコミュニケーションを支える視点．特別支援教育研究，740，32-35．
- ・牧野泰美（2019b）子どもの育ちを支えるうえで大切にしたい視点－自己肯定感を支える教育－．特別支援教育研究，741，32-35．
- ・渡邊美穂・牧野泰美（2012）自分と向き合う子どもの育成－ことばの教室における吃音のある子どもとの学習を通して－．特総研ジャーナル，創刊号，10-15．